

# 日本語自然会話における「話者間反復」について

—— 名詞が反復される場合を対象として ——

## On ‘Repetition between the Speakers’ in Japanese Natural Conversation: Focusing on the Case of the Noun being Repeated

常 艶 麗\*

CHANG Yanli

### (要旨)

日本語の自然会話においては様々な反復現象が見られるが、その中に、ある話者の発話末尾文にある要素が、次の話者の発話冒頭文に現れるような反復現象（話者間反復）がある。

従来の反復現象に関する研究は、主に反復の機能を探究するものであった。しかし、なぜ特定の要素だけが反復されるのかという問題については、未だ解明されていない。本稿では、その理由解明への第一歩として、最適性理論の考え方を利用し、形態的な観点、統語的な観点、談話的な観点から、どのような要素が選ばれて反復されるのかという点について分析する。

その結果、話者間反復現象は、形態的・統語的・談話的制約を含めた相互作用によって生じることが判明した。

キーワード：話者間反復、最適性理論、形態的な制約、統語的な制約、談話的な制約

## 1. はじめに

日本語自然会話においては様々な反復現象が見られる。反復される要素の言語単位によって分類すると、大きく形態素、語、句、文の反復がある。誰の発話を反復するかによって分類すると、一人の発話内での反復と、異なる話者間で起こる反復がある。反復が起こる位置によって分類すると、もとの発話にすぐ続いて反復するものと、離れて出現するものに区別される。反復の形によって分類すると、ほぼ同じ形での反復と、異なる形での反復が現れる。これらの反復現象は「繰り返し」、 「反復」と呼ばれ、従来一括して研究されてきた。特に会話分析では、「繰り返し」と呼ぶことが多いが、「反復」と「繰り返し」が区別されて扱われることは見られないため、本稿では「反復」と呼ぶこととする。

様々な反復現象の中には、反復される要素の言語単位、反復する発話の話者、反復が起こる位置、反復の形などが異なるため、厳密に区別して扱う必要がある。そこで、本稿では以下のような反復に焦点を当てる。

---

\* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

- (1) C: かなり材料を買って家から一歩も出なくていいぐらいのずっと料理して (うん)  
食べて、皿洗って、料理して、食べて、(うん) 皿洗ってみたいなのんびりとした生活  
がこう繰り返されているというか、まあちょっと鼻水が花粉症できつくて  
D: ああ、俺も花粉症、この前山口県庁に行って、山口県庁って山で囲まれてるから

(1) では、話者Cの発話の末尾文にある「花粉症」が話者Dの発話の冒頭文に現れていることが観察される (下線部参照)。これは話者をまたいだ反復であり、話者Cの発話にすぐ続いて、語が反復されている。本稿では、このように、ある話者の発話の末尾文にある要素が、次の話者の冒頭文に反復される現象を「話者間反復」と呼び、これを対象とする。

従来反復現象に関する研究は、コミュニケーション上の働きなど、機能面を扱うのが主であった。しかし、機能的な観点では、なぜ特定の要素だけが反復されるのかという問題について、十分な解答が得られない可能性がある。

そこで、本稿では、日本語自然会話を対象とし、「先行発話のどの要素が選択されて話者間反復が起こるのか」という問題を解明することを目的とする。反復される要素が選ばれる際には、どのような制約が存在するのか、制約同士はどのように相互作用しているのかを明らかにしたい。制約同士の相互作用によって、特定の要素が選ばれて反復されるのではないかという仮説を立てて検証していく。このように考えることによって、「なぜ特定の要素だけが反復されるのか」という問題の解決に一つ近づけることができるのではないかと考える。

本稿では名詞が反復される場合を対象とする。また、名詞が反復される場合では、名詞が1つの場合と2つ以上の場合がある。

- (2) A: 天気は万能やな、天気は万能  
B: そう天気の話しとけば、うん、何とかなる

例えば、(2) では、末尾にある文「天気は万能」には、名詞が「天気」の1つしかない。(1) では、末尾にある文「ちょっと鼻水が花粉症できつくて」には、名詞が「鼻水」と「花粉症」の2つある。本稿では2つ以上の名詞がある場合を扱う<sup>1</sup>。その理由として、名詞が1つの場合は、その名詞が反復されることは予測できるのに対して、名詞が2つ以上の場合にはどちらが反復されるのかは予測できない、どちらも反復される可能性があるからである。

## 2. 先行研究

本節では、2つの部分に分けて、本稿とかかわる先行研究を振り返る。まず、反復現象に関する先行研究を見つめる。次に、トピックに関する先行研究を見つめる。

### 2.1 反復現象の先行研究

まず、日本語の会話における繰り返し (反復) の機能に関する先行研究として、中田 (1992)、熊谷 (1997)、田中 (1997)、松田 (1998)、杉山 (1998)、杉山 (2002)、岡部 (2003)、メイナー

ド (2005), 伝 (2007), 竹田 (2017) が挙げられる<sup>2</sup>。

中田 (1992:273) は、会話における発話の繰り返しがコミュニケーション上の方策として果たす機能として「関說的機能, 心情的機能, 動能的機能, 交話的機能, 詩的機能, メタ言語的機能, 談話構成的機能」という7つのカテゴリーで示しているが、はじめの6種は、Jakobson (1960) による言語の機能として同様のものが提唱されているため、繰り返しに特化した機能とは言い難い。熊谷 (1997) は、繰り返しは、時間的余裕をつくる働きを持っていると指摘した。田中 (1997) は、テレビ番組を文字化したものを利用し、相手の発話を繰り返すことが、対人的にどのような機能を持ち、また会話の展開上どのような役割を果たしているかを考察した。松田 (1998) は、参加者の人間関係など、状況が異なる談話において、それぞれの反復表現の機能の違いについて述べた。杉山 (1998:57) は、テレビ番組の情報提供場面において、ゲストと進行役の会話に見られるくり返しの特徴と機能を観察したことで、「情報の重要性, 種類や時間的制約など様々な要因が「繰り返し」の機能の出現に影響を与えていることがわかった」と述べている。また、杉山 (2002) では、「対談タイプ」「実演タイプ」「講義タイプ」という3種類のテレビ番組を対象とし、繰り返しの形状、位置関係の分布と機能の関係について分析した。岡部 (2003) は、日本人高校生と高校留学生を対象にし、課題解決場面において、繰り返しの対人関係調節機能の考察を試みた。伝 (2007:128) は、発話冒頭付近での語句の繰り返しは、「繰り返し型の主たる機能が流暢な発話産出の実現とその準備に時間を取ることに「事前の弁解」である」と述べた。竹田 (2017) は、「自由対話」と「課題達成談話」という二種類のジャンルに見られる反復を分析した。そこで、反復によってもたらされる表現的側面での協調性と文脈的側面での協調性について論じた。

また、日英両言語における繰り返しの対照研究として、牧野 (1980), 落合・植野・野村 (2006), 町 (2010) は、繰り返しの形式、機能などの側面から、日英両言語の違いを論じた。落合・植野・野村 (2006), 町 (2010) は会話の研究であるが、牧野 (1980) は会話だけではなく、文章における繰り返しの意味機能も探った。

以上挙げた先行研究の中で、本稿と緊密に関わるものがメイナード (2005) である。メイナード (2005) は、繰り返しはトピックの管理とディスコースの結束性を実現すると論述した。それは、ある要素をトピックとして繰り返すことで、「トピックを設定したり、相手のトピックを受けて維持したり、トピックを展開したり、そのトピックについて質問したりという談話上の機能である」(メイナード 2005:171)。すなわち、この記述から、話者間で反復される要素はトピックであることが分かる。また、次の節では、トピックに関する先行研究を述べる。

## 2.2 トピックの先行研究

「トピック」は会話レベルにおいて、「話題」と呼ばれることもある。会話における「トピック」「話題」の定義を論じた先行研究として、メイナード (1993), 申田秀也 (1997), 河内彩香 (2003), メイナード (2005), 庵功雄 (2007), 三牧陽子 (2013), 大谷麻美 (2018) が挙げられる。

本稿では、メイナード (2005) の「トピックが繰り返される」という考え方に従うため、そのトピックの定義を使用する。メイナード (2005:65) では、コミュニケーションの場において、「機能面からとらえると、トピックとは既知、または少なくともそのコンテキストから知ることができる情報で、談話の起点となる要素である」と述べている。

以上のように、様々な場面での反復が研究されてきたが、これまでの会話における反復現象の研究は、主に反復の機能に関するものである。複数の要素が連続する発話の中で、なぜ特定の要素だけが反復されるのかという点については、先行研究では不明なところが多い。話者間反復が起こる際に、トピックのような機能的な観点だけでは説明できない可能性が高い。そこで、本稿では形態的・統語的・談話的な観点から複合的に記述していくことを目指す。話者間反復の現象を同時にこれら3つの観点から記述したものは管見の限りないことから、新たなアプローチによって、この現象に潜む仕組みを解明できるのではないかと考える。

### 3. 本稿の立場

#### 3.1 「話者間反復」の定義

本節では、本稿で対象とする話者間反復についての定義を示すとともに、それが指す範囲についても設定していく。話者間反復を(3)のように統語的に定義する。

##### (3) 話者間反復の定義:

話者Aの発話の末尾文 $S_1$ に含まれるXと、話者Bの発話の冒頭文 $S_2$ に含まれるYが、同じあるいは類似している場合、XとYは話者間反復の関係にある。

A : (…)  $S_1$  … X …

B :  $S_2$  … Y … (…)

ここでは、話者Aの発話には一文しかない場合、その一文が「末尾文 $S_1$ 」となる。話者Aの発話が複数の文からなる場合、末尾にある文が「末尾文 $S_1$ 」となる。話者Bの発話には一文しかない場合、その一文が「冒頭文 $S_2$ 」となる。話者Bの発話が複数の文からなる場合、冒頭にある文が「冒頭文 $S_2$ 」となる。

また、「XとYが同じ」というのは両者の形式が同一であることを示している。一方、「XとYが類似している」というのは両者の形式の一部が同一であることを示している。例えば、「買いました」～「買った」のように、動詞の語幹が同一である場合である<sup>3</sup>。

また、 $S_1$ と $S_2$ は文であり、単文や複文が含まれる。しかし、以下のような場合がある。

##### (4) A : 服も高いし

B : いや、だって服っておかしくない、だってさ

(4) では、Aの発話「服も高いし」のような場合は、白川博之(1990, 1996, 2001, 2008, 2009)の考えに従い、従属節のみで終結した「言いさし文」と見なす。すなわち、(4)のような場合は従属節ではなく、単文として扱うことにする。

$S_1$ と $S_2$ の間に感動詞や接続詞が挟まれる場合があるが、本研究では感動詞や接続詞は文あるいは文の一部とは見なさない。また、以下のような場合は話者間反復として扱わない。

- (5) 020232 D うん  
 020233 C うん, やっぱ覚えるのも難しいんかなっていう, ちょっと思うね, 踏みとどまる理由では, あるかなって感じがするね
- (6) 050290 I うん, 分からん, なんか, 最近  
 050291 J なんか, だって, 服とか, 1回買ったらさ

(5) の「うん」は感動詞, (6) の「なんか」は言いよどみなどの相づち的な発話であるが, これらは話者間反復とは見なさない。

以上から分かるように, (3) の定義は, 「ある話者の発話の末尾文にある要素と, 次の話者の冒頭文にある要素が一致 (類似) している場合」という状態を示している。この状態になっていれば話者間反復になっている, ということを定式化しているに過ぎない。しかし, 重要なことは,  $S_1$  の要素  $X$  が何であるか, なぜ  $X$  が選ばれて反復されるのかということである。この問題を解明することが, 本稿の目的である。その際, 最適性理論 (Optimality Theory) の考え方を応用する。

### 3.2 分析方法

本稿では, 最適性理論を利用し分析していく。制約を理論の中心にすえる最適性理論は, 言語現象を規則ではなく, 制約同士の相互作用によって記述しようとする。アラン・プリンスとポール・スモレンスキー (2008:4) は最適性理論について以下のように述べる。

提案の核心は, 入力に対するどの分析 (出力候補) が対立し合う条件の集合をもっともよく満たすか—あるいはどれがもっとも違反が少ないか—を正確に決定する方法である。ほとんどの入力に関して, 考え得る分析のどれもが多くの制約に違反することになるであろう。文法は, これら全ての分析を, 制約の集合全体をいかによく満たしているかによって評価し, そのリストの中で一番上位となった分析が最適 (optimal) であると宣言する。

本稿では名詞が2つ以上ある場合を対象としている。名詞が2つ以上ある場合では, どの名詞でも反復される可能である, すなわち,  $S_1$  内の名詞がすべて候補になる。しかし, 最終的には特定の要素だけが反復される, すなわち, これらの候補の中から, ある制約によって, 最終的には最適な候補だけが選ばれて反復されるということが, 本稿の考え方である。話者間反復のような反復現象では, 反復される要素が1つに限定されるわけではなく, どの要素も反復される可能性があると考えられる。このような現象を記述する場合, ルールのアウトプットを1つに限定する従来のルールに基づく考え方では, 説明できない。そのため, 複数のアウトプットの候補を容認する最適性理論を採用するのである<sup>4</sup>。

## 4. 調査要領

本稿では、日本語の自然会話における話者間反復を分析するために、日本語母語話者による会話調査を実施した<sup>5</sup>。会話調査では、7つの会話を収集した。被調査者の属性を含め、各会話データの概要を【表1】に示す。

【表1】会話データの概要

データ番号	話者（記号）	性別	年齢	調査日
01	A	女	20	2018年6月1日
	B	女	20	
02	C	男	21	2019年1月28日
	D	男	22	
03	E	男	20	2019年2月1日
	F	男	21	
04	G	女	19	2019年2月13日
	H	女	19	
05	I	女	20	2019年2月15日
	J	女	19	
06	K	男	20	2019年3月17日
	L	男	20	
07	M	女	22	2019年3月27日
	N	女	21	

会話調査は、大学生の友人同士の二者間で行った。調査時間は各30分間である。調査者（筆者）は会話のテーマは指示せず（自由会話である）、また、調査時には同席していない。録音はiPhone 7 plusのアプリ「ボイスメモ」を使用する。

本稿では、会話データを次のような書式で記す。

- 010054 B そうだよ、ジーパンでも、ズボンやったらなんでもいい、スカートはちょっとあれやけど
- 010055 A あーなるほど、え？じゃあ夏とか短パンでいいじゃん
- 010056 B 短パンはちょっと良くないかも（笑）
- 010057 A そうなん？

初頭にある6桁の数字は、個々の会話データのIDである。最初の2桁はデータ番号、次の4桁は発話番号である。その次にあるアルファベットは話者記号である。その次に、会話データを漢字仮名交じりで表記している。

また、会話データの文字化・分析の際には、次のような記号を使用する。

- ， [全角] ごく短いポーズを示す。
- ー 音声の伸ばしを表している。
- ? [全角] 直前部分が上昇調の抑揚で発話されていることを示す。

( )	[半角] 短く, 特別な意味を持たない相づちは, ( ) にくくって入れる。
#	[全角] 聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される回数に応じて, #マークをつける。
(笑)	笑い声を表す。
「人名」	被験者のプライバシーを保護するために明記できない氏名を示す。また, 各データでの出現順番によって通し番号をつける (例えば, 「人名1」, 「人名2」など)。
『 』	[全角] 本や映画などの題名のような固有名詞は, 『 』 でくくる。
□	話者間反復の関係にある要素Xを含んでいる文 (S <sub>i</sub> を指す)。
—	話者間反復の関係にある要素 (XとYを指す)。
~~~~~	統語的な制約によって選ばれる要素。
■	網掛はトピックとなる要素を示す。
S	文
N	名詞
V	動詞
A	形容詞, 形容動詞
P	後置詞 (格助詞, 副助詞, 接続助詞)
Adv	副詞
FP	終助詞
CPL	コピュラ
NP	名詞句
VP	動詞句
AP	形容詞句
CP	従属節

## 5. 分析

本節では, 話者間反復に関係ある要素Xを観察していく。S<sub>i</sub>内にある名詞が2つ以上の場合, 話者間反復が起こる位置によって, 次のような3種類が観察されている。

- 話者間反復が主節に起こる場合
- 話者間反復が従属節に起こる場合
- 話者間反復が倒置文に起こる場合

以下, これらを順に観察していく。なお, 記述を簡潔にするために, 以下は「話者間反復」を単に「反復」と表現する。従って, (3) のXは「反復される」要素と呼ぶことにする。

### 5.1 話者間反復が主節に起こる場合

ここでは、話者間反復が主節に起こる場合の会話データを取り上げる。まず、(7)を見られたい。

- (7) 050752 I あ、でも、**ラリア**はそんなに怖くないか  
 050753 J **ラリア** (笑)  
 050754 I **ラリア**, 長いもん (笑)  
 050755 J **ラリア**っていうん, すごい, 知らなかった  
 050756 I だって, 長いもん  
 050757 J え———— (笑)  
 050758 I 長いもん  
 050759 J この人オーストラリアのことをラリアって  
 050760 I ラリア

(7) では、050759の発話のうち、「ラリア」が反復されている。

ここで問題は、なぜ050760で話者Iは、話者Jの050759の発話の中で「ラリア」だけを選択し反復したのかということである。「人」や「オーストラリア」を反復しても、「この人」や「オーストラリアのこと」を反復してもよいはずであるが、実際は「ラリア」しか反復されていない。そこで、形態的な観点、統語的な観点、談話的な観点からそれぞれ観察していく。

まず、形態的な観点から見ると、反復される「ラリア」は名詞である。名詞が反復されることになる、「ラリア」が選ばれるとともに、「人」「オーストラリア」「こと」も名詞として反復されることになる。しかし、「人」「こと」は形式名詞として、「ラリア」などの名詞と異なる。形式名詞は単独では用いられず、それを修飾する部分を伴って用いられるので、相対的に反復されにくいだろう。そこで、次のような優先順位がつけられる話者間反復の形態的な制約を仮定できる。

(8) 話者間反復の形態的な制約<sup>6</sup>：

文 (S<sub>i</sub>) を構成する要素の中で、以下に示す優先順位が高い要素が反復される。

名詞 > 形式名詞

この「>」は、この左側の位置にある要素が右側より相対的に優先されることを示す。

次に、統語的な観点から見ていく。話者Jの発話「この人オーストラリアのことをラリアって」の統語構造を(9)のように示す。

- (9) [S<sub>i</sub> [VP [NP<sub>1</sub> [Detこの] [N人]] [NP<sub>2</sub> [NP<sub>3</sub> [Nオーストラリア] [Pの]]] [Nこと] [Pを]] [NP<sub>4</sub> [ラリア] [Pって]]]]

反復される「ラリア」の位置を見ると、「ラリア」がNP<sub>4</sub>にある。NP<sub>4</sub>はNP<sub>1</sub>, NP<sub>2</sub>, NP<sub>3</sub>に比べると、S<sub>i</sub>の中で相対的に右にあることが分かる。相対的に右にあるというのは、S<sub>i</sub>の文末に相対的に近



いことを意味する。すなわち、 $S_1$ の文末に相対的に近い「ラリア」が反復されるのである。そこで、次のような話者間反復の統語的な制約を仮定する。

(10) 話者間反復の統語的な制約：

$S_1$ の文末に相対的に近いNが反復される。

(10)の統語的な制約によって、「ラリア」が選ばれることになる。

最後に、談話的な観点から見ていく。談話的な観点からの考察は、メイナード(2005)の「繰り返しはトピックの管理である」という考え方に従う。まず、「トピック」は以下のように定義する。

(11) トピックの定義

会話の中で、ある既出要素が繰り返されて出現する場合、トピックとなる。

すなわち、ある既出要素が繰り返されたら、当該要素はトピックであると確定できる。この会話データを見ると、「ラリア」は050752~050755の発話で繰り返して出現しているので、トピックであると判断できる。従って、050759の発話の「ラリア」はトピックとして、話者Iに反復されている。そこで、メイナード(2005)によると、次のような話者間反復の談話的な制約が存在する。

(12) 話者間反復の談話的な制約：

文( $S_1$ )においては、トピックとなる要素が反復される。

(12)の談話的な制約によって、「ラリア」が選ばれることになる。

以上、形態的な制約、統語的な制約、談話的な制約を仮定した。それぞれの制約で選ばれた要素を【表2】のように分析する。分析する際には、最適性理論の表記法を採用する<sup>7</sup>。

【表2】(7)の話者間反復に関する制約のタブロー

候補	形態的な制約	統語的な制約	談話的な制約
人	%	*	*
オーストラリア		*	*
こと	%	*	*
ラリア			

【表2】において、まず形態的な制約(8)が適用され、「人」「オーストラリア」「こと」「ラリア」が候補となるが、「人」「こと」の優位性が低い。次に、統語的な制約(10)が適用され、「ラリア」が候補となる。そして、談話的な制約(12)により「ラリア」が候補となる。候補として残った要素の中で、最も多くの制約が満たされているものは「ラリア」であり、これが最適な候補となる。従って、実際の会話では、この最適候補である「ラリア」が反復されることになる。

以上のことから分かるように、1つの制約では説明できなかつた現象を、3つの制約の相互作用

によって説明できるのである。

次の会話データを見られたい。

- (13) 060087 K スーツスーツ, その服装で行くなよ, (笑) それならあれやったらたぶん絶対催しとかせんといけんのやない?  
 060088 L え, なんかあるん? 全然わからんのよ, まじで, 一回も参加したことないし  
 060089 K なんかおねえちゃんが結婚したんよ, 姉ちゃんが, そのときに, めっちゃむちゃぶりよ, 飯食って座っただけで急に, 「ひろと, 来て」って言われて, なんか急に出して  
 060090 L 催しって, そういうことか  
 060091 K 急に催し, なんか笑いすぎじゃないか

(13) では, 060090の発話のうち, 「催し」が反復されている。

まず, この話者間反復に関する制約のタブローを示すと, 【表3】のようになる。

【表3】 (13) の話者間反復に関する制約のタブロー

候補	形態的な制約	統語的な制約	談話的な制約
<small>発話</small> 催し		*	
こと	%		*

【表3】において, まず, 形態的な制約 (8) が適用され, 「催し」「こと」は名詞であるため候補となるが, 「こと」の優位性が低い。次に, 統語的な制約 (10) が適用される。話者Lの発話「催しって, そういうことか」の統語構造を (14) のように示す。

- (14) [<sub>S1</sub> [<sub>NP1</sub> [<sub>NP2</sub> [<sub>N</sub>催し] [<sub>P</sub>って]] [<sub>連体詞</sub> そういう] [<sub>N</sub>こと]] [<sub>FP</sub>か]]

N「こと」は相対的に文末に近いので, 「こと」が候補となる。そして, 談話的な制約 (12) が適用される。「催し」は060087の発話ですでに現れている。060090の話者Lが発話する時点で, 「催し」が繰り返されることで, 「催し」がトピックとなる。「催し」がトピックであるため, 候補となる。候補として残った要素の中で, 最も多くの制約が満たされているものは「催し」であり, これが最適な候補となる。従って, 実際の会話では, この最適候補である「催し」が反復されることになる。

また, (15) の会話データについても同様に説明できる。

- (15) 010049 A ね, こう, なんかシャツね, ジーパンにエプロンやろ?  
 010050 B うん  
 010051 A めっちゃいいじゃん  
 010052 B 下自由やしね  
 010053 A あーそうなん?

- 010054 B そうだよ、ジーパンでも、ズボンやったらなんでもいい、スカートはちょっとあれやけど
- 010055 A あーなるほど、え？じゃあ夏とか短パンでいいじゃん
- 010056 B 短パンはちょっと良くないかも（笑）
- 010057 A そうなん？
- 010058 B あー短パンでもいいんかな？

ここでは、010055の発話のうち、「短パン」が反復されている。

まず、この話者間反復に関する制約のタブローを示すと、【表4】のようになる。

【表4】 (15) の話者間反復に関する制約のタブロー

候補	形態的な制約	統語的な制約	談話的な制約
夏		*	*
<small>☞</small> 短パン			*

【表4】においては、まず、形態的な制約(8)が適用され、「夏」「短パン」は名詞であるため、候補となる。次に、統語的な制約(10)が適用される。話者Aの発話「夏とか短パンでいいじゃん」の統語構造を(16)のように示す。

- (16) [<sub>S1</sub> [<sub>AP</sub> [<sub>NP1</sub> [<sub>N</sub>夏] [<sub>P</sub>とか]] [<sub>NP2</sub> [<sub>N</sub>短パン] [<sub>P</sub>で]]] [<sub>A</sub>いい]] [<sub>CPL</sub>じゃん]]

N「短パン」は相対的に文末に近いので、「短パン」が候補となる。そして、談話的な制約(12)が適用される。ここでは、S<sub>1</sub>のどの要素でも既出要素ではない。すなわち、S<sub>1</sub>にトピックが現れていないため、候補もない。候補として残った要素の中で、最も多くの制約が満たされているものは「短パン」であり、これが最適候補となる。従って、実際の会話では、この最適候補である「短パン」が反復されることになる。

次に、(17)を見られたい。

- (17) 040125 G え、すごくない？めっちゃバイトしとる
- 040126 H え、それどれがあれ？
- 040127 G 点々ついとるの全部バイト
- 040128 H あっはっは
- 040129 G あ、でもいろんなやつやったら楽しいかもしれん
- 040130 H それは確かにあるかもね、毎日温泉で暇を持て余しとるからな
- 040131 G 温泉入らんの？あそこで
- 040132 H なんか入れるんよ、あがって、フロントの人に「温泉今日入ってきます」って言ったらなんかタオルとかそういうセットもらえて

ここでは、040130の発話のうち、「温泉」が反復されている。

まず、この話者間反復に関する制約のタブローを示すと、【表5】のようになる。

【表5】 (17) の話者間反復に関する制約のタブロー

候補	形態的な制約	統語的な制約	談話的な制約
毎日		*	*
<small>温泉</small> 温泉			*
暇	%	*	*

【表5】においては、まず、形態的な制約(8)が適用され、「毎日」「温泉」「暇」は名詞であるため候補となる。しかし、「暇を持って余しとる」はコロケーションと見なしている<sup>8</sup>。コロケーション内の名詞は単独では用いられないため、「暇」だけが選ばれて相対的に反復されにくいと考えられる。従って、形態的な制約としては、コロケーション内に含まれていない名詞はコロケーション内の名詞より反復されやすいという優先順位がつけられる。(8)を(18)のように修正する。

(18) 話者間反復の形態的な制約<sup>9</sup>：

文(S<sub>i</sub>)を構成する要素の中で、以下に示す優先順位が高い要素が反復される。

名詞 > コロケーション内の名詞・形式名詞

次に、統語的な制約(10)が適用される。話者Hの発話「毎日温泉で暇を持って余しとるからな」の統語構造を(19)のように示す。

(19) [S<sub>i</sub> [VP[NP<sub>1</sub> [N毎日]] [NP<sub>2</sub> [N温泉] [Pで]] [V暇を持って余しとる]] [FPからな]]

「暇を持って余しとる」は統語上も不可分に結びついているので、全体をVとして扱う。N「温泉」は相対的に文末に近いので、「温泉」が候補となる。そして、談話的な制約(12)が適用される。ここでは、S<sub>i</sub>のどの要素でも既出要素ではない。すなわち、S<sub>i</sub>にトピックが現れていないため、候補もない。候補として残った要素の中で、最も多くの制約が満たされているものは「温泉」であり、これが最適候補となる。従って、実際の会話では、この最適候補である「温泉」が反復されることになる。

次に、(20)について述べたい。

- (20) 010300 A 今日晴れるならチャリで来たら良かった  
 010301 B 今日歩きなん?  
 …… (中略)  
 010307 B ああ、山口大学、今日なんか午前中は微妙に降とったよね  
 …… (中略)  
 010318 A 今日何があったん?  
 010319 B 今日2コマあってだから3コマ目から実験やから  
 010320 A あーご飯食べてたんだ

010321 B ご飯、や今日はあのレポートがあったから

ここでは、010318の発話のうち、「今日」が反復されている。

まず、この話者間反復に関する制約のタブローを示すと、【表6】のようになる。

【表6】 (20) の話者間反復に関する制約のタブロー

候補	形態的な制約	統語的な制約	談話的な制約
<small>日本語</small> 今日		*	
何	%		*

【表6】においては、まず、形態的な制約(18)が適用され、「今日」「何」は名詞であるため候補となる。しかし、「何」は疑問詞であり、「今日」などの名詞と異なる。疑問詞は不定語とも呼ばれている。不定性を持っているため、相対的に反復されにくいと考えられる。従って、形態的な制約としては、名詞は疑問詞(名詞)より反復されやすいという優先順位がつけられる。(18)を(21)のように修正する。

(21) 話者間反復の形態的な制約<sup>10</sup>：

文(S<sub>i</sub>)を構成する要素の中で、以下に示す優先順位が高い要素が反復される。

名詞 > 疑問詞(名詞) > コロケーション内の名詞・形式名詞

次に、統語的な制約(10)が適用される。話者Aの発話「今日何があったん」の統語構造を(22)のように示す。

(22) [S<sub>i</sub> [VP [NP<sub>1</sub> [N 今日]] [NP<sub>2</sub> [N 何] [P が]] [V あった]] [FP ん]]

N「何」は相対的に文末に近いので、「何」が候補となる。そして、談話的な制約(12)が適用される。「今日」は010300~010307の発話で繰り返して出現しているので、トピックとなる。「今日」がトピックであるため候補となる。候補として残った要素の中で、最も多くの制約が満たされているものは「今日」であり、これが最適な候補となる。従って、実際の会話では、この最適候補である「今日」が反復されることになる。

以上、話者間反復に関わる制約を3つの側面から規定し、話者間反復が主節に起こる会話データを考察した。いずれの場合も、話者間反復が起こる際に、この3つの制約によって、最適な候補が選ばれて反復されると仮定することができた。しかし、話者間反復が従属節に起こる会話データも存在する。次の節で扱う。

## 5.2 話者間反復が従属節に起こる場合

ここでは、話者間反復が従属節に起こる場合の会話データを取り上げる。まず、(23)を見られたい。

- (23) 050706 I うん, やっぱ, **ピンク**いいよね  
 050707 J ねー, でも, オレンジ系も好きやけどね  
 050708 I うんうんうん, でも, オレンジでも落ちればなるけ  
 050709 J あー, まあね  
 050710 I と思ったら, **ピンク**はやった方がいい  
 050711 J ピンク, 次ピンクしようかな

(23) では, 050710の発話のうち, 「ピンク」が反復されている。

まず, この話者間反復に関する制約のタブローを示すと, 【表7】のようになる。

【表7】 (23) の話者間反復に関する制約のタブロー

候補	形態的な制約	統語的な制約	談話的な制約
☞ <b>ピンク</b>		*	
方	%		*

【表7】においては, まず, 形態的な制約(21)が適用され, 「ピンク」「方」は名詞であるため候補となるが, 「方」の優位性が低い。次に, 統語的な制約(10)が適用される。話者Iの発話「と思ったら, **ピンク**はやった方がいい」の統語構造を(24)のように示す。

- (24) [<sub>S</sub> [<sub>CP1</sub> [<sub>P</sub>と] [<sub>VP1</sub> [<sub>V</sub>思ったら]]] [<sub>S</sub> [<sub>AP</sub> [<sub>NP1</sub> [<sub>CP2</sub> [<sub>VP2</sub> [<sub>NP2</sub> [<sub>N</sub>ピンク] [<sub>P</sub>は]]] [<sub>V</sub>やった]]] [<sub>N</sub>方] [<sub>P</sub>が]]] [<sub>A</sub>いい]]]]

N「方」は相対的に文末に近いので, 「方」が候補となる。そして, 談話的な制約(12)が適用される。「ピンク」は050706の発話ですでに現れている。050710の話者Iが発話する時点で, 「ピンク」が繰り返されることで, 「ピンク」がトピックとなる。「ピンク」はトピックであるため, 候補となる。候補として残った要素の中で, 最も多くの制約が満たされているものは「ピンク」であり, これが最適な候補となる。従って, 実際の会話では, この最適候補である「ピンク」が反復されることになる。

また, (25)の会話データについても同様に説明できる。

- (25) 050376 I そう, 寒くなりよる時に帰ったら, 暑いんだ, いや, どうっけ? いつ帰ってくるんけ?  
 050377 J あ, そうそう, そういう事  
 050378 I 早いよね  
 050379 J 早い  
 050380 I 5月とかよね  
 050381 J 5月とか, でも, 海外でインターンシップとかするのもありだなとは思って  
 050382 I インターンシップね  
 050383 J うん

050384 I インターンシップかー, はあ, そんなものもあるね

ここでは, 050381の発話のうち, 「インターンシップ」が反復されている。

まず, この話者間反復に関する制約のタブローを示すと, 【表8】のようになる。

【表8】 (25) の話者間反復に関する制約のタブロー

候補	形態的な制約	統語的な制約	談話的な制約
海外		*	*
インターンシップ			*

【表8】においては, まず, 形態的な制約 (21) が適用され, 「海外」「インターンシップ」は名詞であるため候補となる。次に, 統語的な制約 (10) が適用される。話者Jの発話「海外でインターンシップとかするのもありだなとは思って」の統語構造を (26) のように示す。

(26) [S<sub>I</sub> [CP [VP<sub>1</sub> [VP [NP<sub>1</sub> [NP [VP<sub>2</sub> [NP<sub>2</sub> [N海外] [Pで]] [NP<sub>3</sub> [Nインターンシップ] [Pとか]] [Vする]] [Nの]] [Pも]] [Vあり]] [FPだな]] [Pとは]] [VP<sub>2</sub> [V思って]]]

N「インターンシップ」は相対的に文末に近いので, 「インターンシップ」が候補となる。そして, 談話的な制約 (12) が適用される。ここでは, S<sub>I</sub>のどの要素でも既出要素ではない。すなわち, S<sub>I</sub>にトピックが現れていないため, 候補もない。候補として残った要素の中で, 最も制約を受けやすいものは「インターンシップ」であり, これが最適候補となる。従って, 実際の会話では, この最適候補である「インターンシップ」が反復されることになる。

以上, 話者間反復が従属節に起こる会話データを考察した。いずれの場合も, 反復される要素が3つの制約の相互作用で選ばれている。ここまでで扱ってきた会話データは, 典型的な語順のものであるが, 自然会話においては不規則な語順の会話データも存在する。次の節では, 話者間反復が倒置文に起こる場合の会話データを扱う。

### 5.3 話者間反復が倒置文に起こる場合

5.1と5.2では典型的な語順の言語データを扱ったが, 日本語では語順が比較的自由であるため, 話者間反復が含まれる文に倒置が起こっているものがある。まず, (27) を見られたい。

(27) 010213 B あんまり, だから, 学校のこととか全然言ってないもん, あ, 単位が足りないみたいなのは言ったけど, あ, 留年かもみたいなことはさすがに言ったけど

…… (中略)

010231 B 嫌だなーもう単位めんどくさい, ほしいな単位, ただでくれんかな単位

010232 A 単位なー, え, 世界の銘酒辞典とかある

(27) では, 010231の発話のうち, 「単位」が反復されている。

まず、この話者間反復に関する制約のタブローを示すと、【表9】のようになる。

【表9】 (27) の話者間反復に関する制約のタブロー

候補	形態的な制約	統語的な制約	談話的な制約
ただ		*	*
<small>日本語</small> 単位			

【表9】においては、まず、形態的な制約 (21) が適用され、「ただ」「単位」は名詞であるため候補となる。次に、統語的な制約 (10) が適用される。010231の発話のうち、通常の語順の文である「ただで単位くれんかな」の「単位」と「ただでくれんかな」との間に倒置が起こっている。そのうえで、話者間反復が起こっている。「ただでくれんかな単位」の統語構造を (28) のように示す<sup>11</sup>。

(28) [S<sub>1</sub> [VP [NP<sub>1</sub> [Nただ] [Pで]]] [NP<sub>2</sub>t] [Vくれん]] [FPかな] [NP<sub>3</sub> [N単位t]]]

この文構造はNP<sub>3</sub>「単位」が倒置したあとのものである。N「単位」は移動によって文末に位置しているため、「単位」が候補となる。また、「単位」は01213~010231の発話で繰り返して出現しているので、トピックとなる。「単位」がトピックであるため、談話的な制約 (12) により、これが候補となる。候補として残った要素の中で、最も多くの制約が満たされているものは「単位」であり、これが最適な候補となる。従って、実際の会話では、この最適候補である「単位」が反復されることになる。

また、(29) の会話データについても同様に説明できる。

(29) 040001 G なんしよった最近

040002 H 最近? 最近は、3月の頭に、あの部活の演奏会があつて

ここでは、040001の発話のうち、「最近」が反復されている。

まず、この話者間反復に関する制約のタブローを示すと、【表10】のようになる。

【表10】 (29) の話者間反復に関する制約のタブロー

候補	形態的な制約	統語的な制約	談話的な制約
なん	%	*	*
<small>日本語</small> 最近			*

【表10】においては、まず、形態的な制約 (21) が適用され、「なん」「最近」は名詞であるため候補となるが、「なん」の優位性が低い。次に、統語的な制約 (10) が適用される。040001の発話のうち、通常の語順の文である「最近なんしよった」の「最近」と「なんしよった」との間に倒置が起こっている。そのうえで、話者間反復が起こっている。「なんしよった最近」の統語構造を (30) のように示す。



(30) [S<sub>1</sub> [VP [NP<sub>1</sub>t] [NP<sub>2</sub> [Nなん]] [Vしよった]] [NP<sub>3</sub> [N最近t]]]

N「最近」は移動によって文末に位置しているため、「最近」が候補となる。そして、談話的な制約(12)が適用される。ここでは、040001からこの会話が始まるため、S<sub>1</sub>のどの要素でも既出要素ではない。すなわち、S<sub>1</sub>にトピックが現れていないため、候補もない。候補として残った要素の中で、最も多くの制約が満たされているものは「最近」であり、これが最適な候補となる。従って、実際の会話では、この最適候補である「最近」が反復されることになる。

以上、倒置が起こっている会話データを考察した。ここで分かったことは、倒置構造においても、話者間反復が起こる際に、(10)、(12)、(21)の3つの制約によって、最適な要素が選ばれて反復されるということである。

## 6. まとめ

5節においては、S<sub>1</sub>に2つ以上の名詞が現れる会話データを観察した。その結果、話者間反復がどこに起こっても、同じ3つの制約に従って最適な要素が選ばれて反復されることが分かった。その3つの制約を再掲すると、次の通りである。

(31) (=21) 話者間反復の形態的な制約：

文(S<sub>1</sub>)を構成する要素の中で、以下に示す優先順位が高い要素が反復される。

名詞 > 疑問詞(名詞) > コロケーション内の名詞・形式名詞

(32) (=10) 話者間反復の統語的な制約：

S<sub>1</sub>の文末に相対的に近いNが反復される。

(33) (=12) 話者間反復の談話的な制約：

文(S<sub>1</sub>)においては、トピックとなる要素が反復される。

(31)の形態的な制約では、名詞が反復されやすいが、疑問詞(名詞)、コロケーション内の名詞・形式名詞は相対的に反復されにくい。ここには、定性(definiteness)の問題があるのかもしれない<sup>12</sup>。疑問詞は名詞よりは定性が相対的に低いと考えられる。ただ、コロケーション内の名詞・形式名詞が定性という尺度で測れるかどうかについては、現時点では不明である。

(32)の統語的な制約で、S<sub>1</sub>の文末に相対的に近いNが反復されるというのは、反復される要素はおそらくS<sub>1</sub>の中で「文末により近い位置を指向」しているのではないかと考えられる。文末に近くなるということは、次の話者の発話の冒頭にも近くなる。本稿では、S<sub>1</sub>しか考察していないが、もしS<sub>2</sub>におけるYが統語的に左寄り、すなわち「文頭により近い位置を指向している」とすると、XとYの統語的な隣接性の度合いによって話者間反復を説明できるかもしれない<sup>13</sup>。

(33)の談話的な制約で、トピックとなる要素が反復されるというのは、話者間反復にはメイナード(2005)の言うトピックの管理という談話構成上の機能が働いているからではないかと考えら

れる。

以上より、話者間反復という現象は、1つの領域の制約だけが関与しているものではなく、形態的・統語的・談話的といった3つの制約の相互作用によって起こるものであると考えられる<sup>14</sup>。

## 7. 今後の課題

本稿では、名詞が反復される場合の話者間反復に関わる3つの制約を明らかにした。しかし、未解決の問題も残っている。

最初の問題点は、以下の会話データを見られたい。

- (34) 010436 A まあ、天気予報って当てにならないからね  
010437 B まあ、予報だから

(34) では、統語上の最小単位である「天気予報」全体が反復されているわけではなく、その一部分である「予報」だけが反復されている。本稿で扱った会話データの中で、(34) のような会話データは5つしか見られない。出現数としては少数であるが、その理由については不明である。別の原因があるかもしれない。今後は会話データを増やすことで、同じような会話データをまとめて観察する必要がある。

次の問題点として、本稿では名詞が反復される場合だけを扱ったが、話者間反復は名詞だけに起こるわけではないという点がある。名詞以外の場合では、どのような話者間反復が出現するのかを観察する必要がある。例えば、(35) のような会話データが観察されている。

- (35) 010036 B 男のひと結構おるよね  
010037 A うーん、おるおる、なんでやろうね

(35) では、話者Bの発話の「おる」が次の話者Aに反復されている。「おる」は動詞である。また、形容詞が反復される会話データも観察されている。動詞、形容詞が反復される場合は、名詞が反復される場合とどのような関連性があるのか、どのような制約で説明できるのか、これは今後の課題である。

また、同じ要素を2回反復する会話データも見られる。例えば、(35) の話者Aは「おる」を2回反復している。なぜ2回反復するのか、それは話者間反復とどのような関連性があるのかという点も今後の課題として残されている。

さらに、(36) のように、話者間反復が会話データの特定の箇所では集中的に繰り返される場合も存在する。このような場合では、話者間反復は談話構造とどのように関連しているのかも今後の課題である。

- (36) 010444 A 山口風強いよ  
010445 B 強いね、確かに強いって言われてるわ、なんか

010446 A 強い強い, もう何て言うか傘折れそうなくらい風吹くじゃん

最後に、いずれの場合も会話データの全体量が不足していることは否めない。今後、さらに会話データを増やし、検証を行う必要がある。

## 8. おわりに

本稿では、日本語自然会話で観察される反復現象の一つである話者間反復を対象として、最適性理論の考え方をを用いて、「会話の中のどの要素が選択されて反復されるのか」という問題について解明を試みた。その結果、反復される要素が選択される際、形態的・統語的・談話的な制約が相互作用しているということが判明した。本稿での3つの観点からの記述や制約は、少なくとも先行研究の意味・機能的アプローチを補うものであり、それゆえ非常に意義があるものと考えられる。また、本稿で扱った話者間反復は単なる反復現象の一種類であるが、その成果から考えると、反復現象が異なる側面に関わっていることが予想できる。ただ、多種多様な反復現象が存在し、反復現象全体を解明することは、現時点では難しいと考える。それは大きな課題として残っているが、本稿の成果は、反復現象を解明するための複合的アプローチの新たな一歩であると考えられる。

## 注

- 1 本稿では、数量的な傾向は行っていないが、名詞が反復される場合、現在まで収集した7本の会話データでは、名詞の反復は117例であり、そのうち、名詞が1つの場合は68例あり、名詞が2つ以上の場合には49例ある。また、本稿では2つ以上の名詞がある会話データを9つ挙げて説明する。
- 2 日本語の文章における繰り返し（反復）の機能に関する先行研究として、佐久間（1993）、小林（1998）、塩澤（2005）が挙げられる。繰り返し（反復）のレトリック機能についての先行研究には中村（2003）、石黒（2007）がある。また、日本語教育場面における日本語母語話者と日本語学習者による繰り返しの現れ方、機能などの違いについて、森恵・前原・大浜（1999）、堀内（2001）、福富（2010）がある。これらの先行研究は本稿と緊密な関係がないため、詳細な説明を略す。
- 3 現時点ではこの場合しか観察されていないが、「類似」の定義は今後厳密に規定していく必要がある。
- 4 ただし、最適性理論の考え方と本稿での考え方と大きく異なる点は、前者では、例えば音韻部門（phonological component）であれば、

音韻的制約だけの相互作用を考慮しているのに対し、後者では、部門（component）を超えた制約どうしの相互作用を仮定していることである。また、後者では、前者で用いられているような制約のランキングについては、現時点では導入していない。

- 5 日本語母語話者による会話調査は、2018年から始めた。会話調査を始める前に、被調査者に「話者承諾書」を渡し、個人情報や会話データが記された資料は、厳重に保管すると説明し、調査への参加の同意をもらっている。
- 6 本稿で挙げられる「形式名詞」は（7）の「人」、「こと」、（13）の「こと」、（23）の「方」である。それ以外、「辺」「者」「時」「ところ」も形式名詞である。
- 7 最適性理論の表記法は、以下の通りである。3つの制約は一番上の行に並ぶ。反復される可能な候補は一番左の列に並ぶ。空欄は、当該の候補が当該の制約が満たされていることを示す。「\*」は、当該の候補が当該の制約に違反していることを示す。記号「☐」は、この候補がもっとも多くの制約によって選ばれるものであり、最適な候補を指し示す。「%」は、最適性理論で使われていないが、本稿では、より反復されにくいいため、候補となる優位性

が低いことを示す。

- 8 コロケーションの定義について、『言語学大辞典 第6巻 術語編』(1996)、金田一(2006)、田野村(2012)が挙げられる。まず、『言語学大辞典 第6巻 術語編』(1996:128)では、以下のように説明される。「語は、普通、単独に用いられるよりは、ほかの語とともに用いられるものである。その場合、2つの語は、意味上関連することもあり、また、文法的な関係(grammatical relation)をもつこともある。前者の関係を縁語関係(collocation)といい、後者の関係を類結合関係(colligation)という。縁語関係は、コロケーション、連語関係などとも訳され、類結合関係は、統合、類連結とも訳される。たとえば、日本語で、サエズルという動詞は、必ずコトリという名詞と結びつく。また、ホエルという動詞は、必ずイヌとトラとか、かなり強力な獣についていわれる。このような語と語との関係(共起関係, cooccurrence relation)が縁語関係で、その関係は語彙的(lexical)に、したがって、意味上密接な連想(association)をなす概念間の関係である。(中略)この縁語関係は、互いに縁語になっている個々の語の間の語彙的な関係である。これに対して、類結合関係は、語の統語的(syntactic)な類(class)と類との関係である。たとえば、他動詞とその目的語との関係などの文法的関係である。いずれも統語構造(syntactic structure)の中で、語と語の間に密接な連想関係(associative relation)が保たれるものである」。次に、金田一(2006:2)はコロケーションを「二つ以上のことばが結びついてできたことば」と定義している。また、田野村(2012:212)はコロケーションを「慣用的な複数語の共起現象」とゆるく規定している。これらの定義に従ってコロケーションを判断する。
- 9 本稿で挙げられる「コロケーション内の名詞」は(17)の「暇を持って余しとる」の「暇」、(34)の「当てにならない」の「当て」である。それ以外、「気がする」の「気」、「人当たりがきつい」の「人当たり」も「コロケーション内の名詞」である。
- 10 ここで疑問詞(名詞)はコロケーション内の名詞や形式名詞より優位性が高いという優先順位をつけたのは、名詞が1つの場合、以下のような疑問詞(名詞)が反復されている会話データが見られるからである。

(i) 020260 D ラーメン行くんだったらど

こ? どこがある?

020261 C どこ? えー? どこやろう

(i) では「どこ」が反復されていることから分かるように、疑問詞(名詞)が反復されないということはない。しかし、コロケーション内の形式名詞は、それが1つしかない場合でも、反復された会話データは見られない。現時点では、コロケーション内の名詞と形式名詞は反復されえないと言えるだろう。従って、「名詞 > 疑問詞(名詞) > コロケーション内の名詞・形式名詞」という優先順位となる。

- 11 生成文法では、日本語における比較的自由的な語順の移動を「かきませ規則(scrambling)」によって捉える考え方があり。その場合、文構造上では、移動元のNPには痕跡(t)を残し、移動先の「単位」に同じインデックスtを付けることによって、両者が同一の要素であることを示す。
- 12 「定性とは、先行する文脈で既に言及されている事物のように、何らかの手段により同定可能な(identifiable)事物を指示することである。」(原口ほか編2016:142)
- 13 ここでの仮説は、近年盛んに研究されている「周辺部(peripheries)」とも関連があるかもしれない(cf. 小野寺編2017)。Traugott(2017:63/86)は“Periphery is the site in initial or final position of a discourse unit where metatextual and/or metapragmatic constructions are favored and have scope over that unit.”/「周辺部とは談話ユニットの最初あるいは最後の位置であり、ここではメタテクスト的ならびに/ないしはメタ語用論的構文が好まれ、ユニット全体を作用域とする」と定義している。話者間反復は一つの談話ユニットの周辺部で起こっているというような考え方もできるかもしれない。
- 14 本稿では2つ以上の名詞がある場合しか扱わなかったが、名詞が1つしか現れていない場合でも(31)、(32)、(33)によって説明できる。すなわち、S1内に名詞がいくつ存在したとしても、同じ3つの制約によって、この現象を説明できる。

## 参考文献

- アラン・プリンス、ポール・スモレンスキー、深澤はるか訳(2008)『最適性理論—生成文法における制約相互作用』岩波書店  
庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性

- の研究』くろしお出版
- 石黒圭 (2007) 「第10講 繰り返しとリズムー反復文体一」『よくわかる文章表現の技術V—文体編一』明治書院 pp.206-228
- 大谷麻美 (2018) 「日・英語の初対面会話における話題の連鎖と展開—共-選択の観点からの分析一」『社会言語科学』第21巻第1号. pp96-112
- 岡部悦子 (2003) 「課題解決場面における「くり返し」」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第16号 pp.97-116
- 落合るみ子・植野貴志子・野村佑子 (2006) 「日本語会話における同調促進装置としてのあいづち、繰り返し、テイクオーバー：米語会話との比較から」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第12号 pp.29-41
- 小野寺典子編 (2017) 『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』ひつじ書房
- 亀井孝・千野栄一・河野六郎 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂
- 河内彩香 (2003) 「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『早稲田大学日本語教育研究』3号. pp41-55
- 金田一秀穂 [監] (2006) 『知っておきたい日本語結びついたことばコロケーション辞典』学習研究社
- 串田秀也 (1997) 「会話のトピックはいかにつくられていくか」谷泰 [編] 『コミュニケーションの自然誌』新曜社. pp173-212
- 熊谷智子 (1997) 「くりかえす」佐久間まゆみほか [編] 『文章・談話のしくみ』おうふう pp.38-48
- 小林一貴 (1998) 「文章表現における語の繰り返しの機能—作文分析の観点としての「結末的連鎖」を中心に—」『人文科教育研究』第25号 pp.57-64
- 佐久間まゆみ (1993) 「日本語の文章構造 I」宮地裕ほか [編] 『日本語の表現と理解』放送大学教育振興会 pp.90-98
- 塩澤和子 (2005) 「コラムに観察されるくり返しの機能」『文藝言語研究・言語編』第47号 筑波大学文藝・言語学系 pp.15-31
- 白川博之 (1990) 「「カラ」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要 (第2部)』39号. pp249-255
- 白川博之 (1996) 「「ケド」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』第6号. pp9-17
- 白川博之 (2001) 「接続助詞「シ」の機能」中右実教授還暦記念論文集編集委員会 [編] 『意味と形のインターフェイス (下巻)』くろしお出版. pp825-836
- 白川博之 (2008) 「「言いさし文」の談話機能」串田秀也・定延利之・伝康晴 [編] 『「単位」としての文と発話』ひつじ書房. pp1-25
- 白川博之 (2009) 「「言いさし文」の研究」くろしお出版
- 杉山ますよ (1998) 「進行役とゲストの発話に見られる繰り返し」『言語文化と日本語教育』第16号 pp.46-57
- 杉山ますよ (2002) 「くり返しの形状・分布と機能」『別科論集』第4号 大東文化大学 pp.67-87
- 竹田らら (2017) 「どの場面で、誰が、何を、何のために「繰り返す」のか—二種類のジャンルにおける「反復」の機能とそれがもたらす協調性—」『日本語学』36 (4) 明治書院 pp.70-80
- 田中妙子 (1997) 「会話における〈くりかえし〉—テレビ番組を資料として—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第9号 pp.47-67
- 田野村忠温 (2012) 「日本語のコロケーション」堀正広 [編] 『これからのコロケーション研究』ひつじ書房 pp.193-226
- 伝康晴 (2007) 「発話冒頭付近での語句の繰り返しの機能」串田秀也ほか [編] 『時間の中の文と発話』ひつじ書房 pp.103-133
- 中田智子 (1992) 「会話の方策としてのくり返し」国立国語研究所 [編] 『国立国語研究所研究報告集13』秀英出版 pp.267-302
- 中村明 (2003) 「文章・談話のレトリック」佐久間まゆみ [編] 『朝倉日本語講座7 文章・談話』朝倉書店 pp.191-210
- 原口庄輔ほか [編] (2016) 『増補版 チョムスキー理論辞典』研究社
- 福富奈美 (2010) 「日本語会話における「くり返し」発話について」『言語文化研究言語情報編』(5) 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科 pp.105-125
- 堀内奈美 (2001) 「会話における「くり返し」の発話について」『龍谷大学国際センター研究年報』第10号 pp.19-31
- 牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法』大修館書店
- 町沙恵子 (2010) 「日英会話内に見られる繰り返しの対照的メカニズム—他者の発話の繰り返しの考察—」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第16号 pp.57-74
- 松田文子 (1998) 「日常談話における反復表現の機能に関する一考察」『言語文化と日本語教育』第16号 pp.58-69
- 三牧陽子 (2013) 『ボライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版
- メイナード, 泉子・K (1993) 『会話分析』くろし

お出版

メイナード, 泉子・K(2005)『談話表現ハンドブック』くろしお出版

森恵理香・前原かおる・大浜るい子 (1999)「ターン譲渡の方略としての「繰り返し」と「問い」」『広島大学日本語教育学科紀要』第9号 pp.41-49

Traugott, E.C. (2017) "A constructional exploration into "clausal periphery" and the pragmatic markers that occur there." (柴崎礼士郎日本語訳: 「節周辺」と同領域に生起する語用論標識の構文的考察) 小野寺典子 [編] (2017) pp.55-73 (日本語訳: pp.75-97)